



研究成果報告

ヴェーニングのバイエルン公国版画集成のこと

ステファン・ブッヘンベルゲル
(非文字資料研究センター 研究員)



図1 版画家ミハエル・ヴェーニング
(1645-1718) (Wikicommons)

わたしはミュンヘン育ちである。わたしの両親の家にも祖父母の家にも、部屋の壁には、ミュンヘンの市場を描いたこの版画が掛かっていた。



図2 M・ヴェーニング『ミュンヘンの市場 Der Markt zu München』
(Wikicommons)

版画の背景に偉容を見せる聖母教会のようなランドマークのいくつかは、わたしには馴染みのものだった。けれども、有名なグロッケンシュピールのついでに

新市庁舎のような建物は描き込まれていないから、この版画はかなり古いものなのだろうと思っていた。

『18世紀ヨーロッパ生活絵引』の編纂プロジェクトにかかわるようになったときのわたしの驚きを想像してみてほしい。この版画は、18世紀初頭というわりあい新しい時代に作成されたものだったし、なんと、バイエルン公国をいわば目録化して見せるおよそ850点の版画集成のなかの1点だったのである。版画集成を作成したのは、高名な版画家ミハエル・ヴェーニング(Michael Wening, 1645-1718)だった。

ヴェーニングは、1645年にニュルンベルクに生まれた。父親バルタザール・ヴェーニングは豚肉屋だったが、ミハエルは家業を継がず、版画家になった。彫版技術をどこで身につけたのか正確にはわからない。最初の版画作品は父親と名付け親の肖像画である。1668年にヴェーニングは故郷の町から逃げ出さなければならなくなった。妻でない女性に子供を産ませてしまったからである。当時、これは重大な犯罪だった。逃亡した先がミュンヘンである。

バイエルン公国の宮廷で版画家の職を得るまでは何年も苦労つづきだった。ヴェーニングは、その間にプロテスタントからカトリックに改宗し、1671年にはようやく結婚もした。1679年頃には、ヴェーニングは経済的に幾分成功しはじめていた。フェルディナント・マリーア選帝侯が死去したのち、後継のマクシミリアン2世エマヌエル公の統治下で、宮廷版画家の職(俸給付き)を得たのである。このマクシミリアン2世エマヌエル公は、父公より冒険心に富んでいたから、ヴェーニングの画才は、たとえば対トルコ戦争(1683-1699)のような軍事行動や戦勝を描く機会を豊富に与えられた。公は自分の功績を版画に記録させたからである。ただし、ヴェーニングは、これらの出来事を目撃したことは一度もなく、他の画家たちのスケッチを使って戦報を版画化したのである。

選帝侯の周囲の出来事を版画にするのとは別に、ヴェーニングはバイエルン全土の地誌的な版画を作成することにも関心を持つようになった。これは、オーストリアを描いたゲオルク・マティアス・ヴィッシャーや、ヨーロッパ各国の首都を描いたマテーウス・メリアンの先例にならったのである。1696年に、ヴェーニングは、バイエルン公国の4つの行政地区を目録的に描き出す任務を与えられた。ヴェーニングの大作『バイエルン公国の歴史的地誌的描写 *Historico-topografica descriptio Bavariae*』の第1巻が印刷されたのは1701年のことである。それは、ミュンヘン地区を目録的に記録したものであった。もちろん、このころになるとヴェーニングはひとりきりで彫版をおこなっていたのではなく、数名の彫版師たちを助手に使っていた。ここにも、彼が経済的にも芸術家としても成功していたことが見て取れる。

ところが、宮廷の官僚主義にも妨げられ、マックス・エマヌエルの戦争もこのころになると不調になっていた。ヴェーニングは、当初計画していた850枚の版画を存命中に完成させることができなかった。ミハエル・ヴェーニングが1718年に死んだあと、息子のバルタザールが父親の仕事を引き継いだ。バルタザールもこの連作を完成させることができなかった。ようやく1721年、1723年、1726年に、残り3つの行政区であるブルクハウゼン、ランツフート、シュトラウビングの地誌的版画集が出版された。今日にいたるまで、『バイエルン公国の歴史的地誌的描写』は18

世紀初期の生活ぶりを、じつに魅力的に伝える源泉でありつづけている。この版画集成は、その後忘れ去られてしまった多数の城や修道院などの建物を描き出しているのである。

(鳥越輝昭訳)



図3 『カリング城 Castle Kalling』(Wikicommons)



図4 『アンデヒス“聖山”Der Heilige Berg Andechs』(Wikicommons) 修道院の建物が山に広がっているのが見える